



## 広島県 S 農協における 組織改革について

梶川 耕治

今、総合農業協同組合は重大な1つの転換期に立たされています。本年4月1日のペイオフ解禁に伴い、金融業界においても不良債権処理が加速し、大型倒産が出る中、JAも新たな競争時代に突入しました。

今日ほど、国、地方など多様な段階で行政改革と地方分権、規制緩和等が叫ばれたことはありません。JA 経済連も全農と合併しましたが、どれ程の効果が上がったでしょうか。組織の巨大化により、ますます仕組みが組合員に分かりにくくなるばかりです。

現在までの当 JA の改革では、11 の支所と 2 つの出張所を 3 つの支所と 3 つの営農センターに統廃合しました。廃止された 9 支所は、職員各 1 名の 9 つの事務所に再編され、農機センターも株式会社化することで合理化されました。人件費の節減では、早期退職で 20 名が削減され、農機センターの別会社化に伴う 10 名減と合わせると、全体で 30 名の人員削減が断行されました。現在、この合理化より 1 年が経過しましたが、職員の意識改革は進みつつあるものの、一番大切にされるべき組合員とのふれあい活動が不十分で、渉外員の育成の強化が必要です。

また、私たちの JA においても広域合併問題が取りざたされて早 5 年が経過しましたがいまだに実現していません。当初 8 つの JA による合併研究委員会が設置され、数回に及ぶ委員会で協議をしてきましたが、このうち

のある JA が途中で債務超過に陥り、8 つの JA の中の別の JA に吸収合併されています。こうした状況の中、組合員の間では「不良債権はこれに止まらないのではないか」との不信感も生まれ、合併に消極的な JA まで出現しました。このため、8 つの JA による合併は棚上げになり、推進委員会の設置まで至りませんでした。

その後、現在当 JA は県中央会の仲介指導により近隣の JA との間で広域合併を推進中です。これまでに 6 回に及ぶ合併委員会を開催し、14 年度を目標に協議を進めているところですが、以下のような課題が山積しています。

自己資本比率をできるだけ高めること（特に、一組合員当たりの出資金を最も高い JA にそろえる）

固定比率を高めること（中山間地域ではこの比率が一般的に低い）

不良債権処理を進めること（資産査定、引き当て処理を進める）

しかし、経営状態が良い JA に資産条件をそろえることができるくらいなら、何も合併など推進するまでもありません。県中央会は「県下 1 JA」の構想を立て、指導力を強化して早急に実現する必要があります。さもないと、今後の合併は救済目的または吸収合併しかできなくなるように思われます。

これまで経営が良いとされていた JA においても、多くの有価証券を保有していたため、時価会計により大きな差損が生じています。このため自己資本比率が 4 % を下回る例が 2 件発生し、既にこれら JA については救済合併が決まっています。このような状況を考えると、小異を捨て大同の見地で合併を早急に推進し、組合員および地域住民により良い金融事業サービスを提供することを足がかりとして、本来 JA の理念である営農指導事業の

充実を図り、組合員の営農コストの低減と所得向上を図ることが求められています。しかもこうした合併は、JA に体力のあるうちでないと組合員の高齢化による脱退の影響も大きくなりますし、組合員自身の意識減退への歯止めにもなりません。

また、仮に合併が成立しない場合においても、JA の生き残りのためには一刻の猶予も許されない状況に変わりはありません。そのため JA 側は、財務指標の増強および改革のビジョンについて理事会で徹底した議論を行い、組合員に理解されるまで根気よく説明会を開催する必要があります。そして、提示された改革ビジョンに基づいて活発な議論を交わすことで透明性をもった改革への協力をお願いします。

(広島県世羅郡・世羅幸水農園前代表)

## 農作業体験学習に期待するもの

宮田 喜代志

昨春、子育ての活動支援で40人ばかりの大人・子どもに笥掘りを指導するという機会があった。ほとんど初めてで穴掘りすら大変なのに、地下茎の切断となると皆目見当がつかないという子ばかりであった。私が、そこに掘った地面めがけて一突き入ると、ぼっこりと笥が跳ね上がりごろんと横になった。それを見ては、「魔法みたい」と子どもたちが喚声をあげていた。知的障害者の授産施設と合同で行ったこの行事には、大人たちもたくさん参加していたが、驚くことに経験者はほんのわずかに過ぎなかった。

高度経済成長後、私たちの社会は、目覚ましい進歩を遂げたといわれている。その一方で、物質的な豊かさと引きかえに自然環境の

破壊が進み、大地とのじかの接触ができなくなっている。農産物の生産現場を経験するなどという機会は、「普通の」子ども達には全くないといってよい。

こうした自然(農業)からの乖離・隔離を問題にした議論はさかんに行われているようだが、土や泥との交わりは本当に疎まれているのであろうか。と言うのは、子どもたち、とりわけ幼児たちの生活の中では、実はそれらが最も尊敬の対象であることが容易に分かるからである。最近流行りの泥ダンゴを丁寧に磨き上げている真剣な眼差しを見れば、なるほど思っていただけであろう。

2002年4月より、文部科学省では「総合的な学習の時間」をもっと取り入れるという。この中で自然教育が位置づけられる以前から、たくさんの小学校や幼稚園・保育所で農作業体験がカリキュラムに取り入れられ、それなりに効果が認められたようである。しかし、それらの多くは単発のイベントであることが多く、結局農業の本質に迫ることなく終わっているように思われる。

子どもの成長発達是一本筋で決まるものではない。それは、連続的かつ重層的な経験の中で形作られるものであり、環境との有機的な結合なしには捉えられない。私は、さかんに行われている農作業体験が、農作業を通じて発達を促すことを目論んでいながら、その実農業とは何であるかということについて非常に理解が浅いのではないかという疑念を持っている。

農作業を取り入れた学習プログラムを作るのであれば、農作業を一連の作業体系から切り離していいものであろうか。また、現実地域で行われている生産活動との比較や、歴史・風土・地域社会とのつながりを具体的に認識できるような組み立てにすべきではないだろうか。

実に欲張りなことを言ってきたが、私は残念ながら日本の教育の現状は、「着せ替え人形」